

阪神淡路大震災被災者の生活復興過程にみる4つのパターン —2001年・2003年・2005年兵庫県生活復興パネル調査結果報告—

4 recovery patterns from the Hanshin-Awaji Earthquake: Using the 2001-2003-2005 panel data

黒宮 亜希子¹, 立木 茂雄², 林 春男³, 野田 隆⁴, 田村 圭子⁵, 木村 怜欧⁶

Akiko KUROMIYA¹, Shigeo TATSUKI², Haruo HAYASHI³
Takashi NODA⁴, Keiko TAMURA⁵, and Reo KIMURA⁶

¹ 吉備国際大学 社会福祉学部

Department of Social Work, Kibi International University

² 同志社大学 社会学部

Department of Sociology, Doshisha University

³ 京都大学 防災研究所

Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

⁴ 奈良女子大学 人間文化研究科

Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's University

⁵ 新潟大学 災害復興科学センター

Research Center for Natural Hazards and Disaster Recovery, Niigata University

⁶ 名古屋大学 災害対策室

Disaster Management Office, Nagoya University

The purpose of this research clarifies Great Hanshin-Awaji Earthquake the victim's recovery by using the panel data(N=297).And,it was examined whether there was a constant pattern in the transition of the life recovery feeling. As a result, the transition pattern of a long-term life recovery feeling afterwards of year sixth has been decided for the victim. And,it was clarified that the transition of victim's life recovery feeling divided into four patterns(+ + type, +type, - type, -- type).

Key Words : lonigtudinal survey, panel survey, long-term recovery ,cluster analysis, 4 recovery patterns

1. はじめに

(1) 問題

近年世界各地で多発する大規模な自然災害にみまわれた被災者の“生活復興”とはどの程度の時間を要し、どのようなプロセスを経て、こういった社会的要因に支えられ生活復興を成し遂げるのであろうか。また、いち早く生活復興を完了した被災者とはどのような人たちであり、反対に生活復興に大変長い時間を要するのは、どのような人たちであらうか。大規模な災害に見舞われた人びとがどのようなプロセスを経て復興へと向かっていくのか、そのメカニズムの解明は、今後“被災者支援の原則”を提示する際の一つの貴重な資料になると考える。

被災者の長期的な生活復興のメカニズムを明らかにするための課題は、被災者自身の被災後からの行動や意識の変容を長期的に追跡することである。しかし、縦断的に被災者を追うこと、しかも様々な属性の被災者をその対象とすることは非常に困難である。

被災者の生活復興のメカニズムについての先行研究は、大きく以下の4群に分類される。①阪神淡路大震災被災者を対象とした詳細なエスノグラフィーにもとづく研究(被災後10時間・100時間・1000時間目までの災害過程

を解明)¹⁾、②阪神淡路大震災被災者を対象とし、被災後4年目までの変化を質的および量的に同一対象者に繰り返し求めた研究²⁾、③米国におけるハリケーンにより被災した中小自営業経営者の長期的な復興経緯についての研究^{3) 4)}、④阪神淡路大震災被災者を対象とした大規模社会調査を実施し、その結果をもとに生活復興について比較や分析を試みた研究^{5) 6) 7) 8) 9)}らである。

しかし、これらの先行研究について、①群では、1000時間目以降の被災者の復興過程について、②群では、同一被災者の経年変化を被災後4年目まで追従しているが、5年目以降の長期的な被災者の姿が課題といえる。③群については中小企業従業者以外の属性をもつ被災者の復興過程について、④群については、1時点での生活復興についての被災者の意識や態度を分析するのみに留まっている。以上の視点より、①②③④の先行研究群はいずれも被災者の長期的な生活復興の変化のメカニズムの解明という視点からみれば、成し遂げられてはいないと考えられる。

本研究では、近年、社会科学分野で注目されているパネル調査^{10) 11) 12) 13) 14)}を被災者の復興メカニズムの分析資料として用いる。パネル調査では、対象者、調査項目(一定程度)が固定されているため、時間の経過とと